伊吹の前へ長く横はつて居る山、俥夫に
「あの山は」と聞けば
「七尾山で御座います」と答へる。
やがて又大きな村へ入る。左手に大きな森があつて、其隣が學校、それから寺院、駐在所とならんで居る。東淺井の片田舎の樣が奥ゆかしい。
一町ばかりも走つたのだらう。再び郊外へ出た。段々に上り坂になつてる所を見ると、堤防でもあるのだらう。
やがて俥はまだ新しい橋の上を走つて居る。俥夫に聞けば草野川と答へる。どちらの堤も竹藪續きで、河底には高く低く堆積した砂利、水は涸れて少しもない。橋を下りるとなら、くぬぎ、けやきなどの生ひ茂つた森。森を通り抜けると稲田をこして藁葺の屋根が見える。
目的地は一歩〳〵近づいて來るのだ。

鎌倉三代懷古

第四學年乙組　幸島貞一

此所湘南の一天地　七里ヶ濱の磯傳ひ
沼の葦かる鎌倉に　七百年の其の昔
三代榮華の其の夢は　由比ヶ濱邊の磯千鳥
入日を招く淨海が　榮華驕るを西の海に
壽永の秋の朝露と　打拂ひたる其の時に
三代執權の元勳は　少スピキオの慮なかりき
都をは今日を限りの關水に　濡るゝ衣をしぼらんと
急ぐ思ひに足惱み　腰越え兼ねて又惱む
九郎判官義經が　心の中ぞあはれなれ
賤のをだまき繰り返し　峰の白雪ふみわけて
入りにし人をしたふとて　白雪の神うちはへて
鎌倉殿も畏れねば　諸大名をも憚らぬ
賤の風姿天女の舞か
富士の高嶺のその裾野　笹龍膽や三つ鱗
列ぶ幔幕引あげて　父の仇よ工藤祐經
二孤の怨を受けすやと　鋭き太刀風の閃に
將軍の命危かりし
哀れなる哉賴家は　下刹上の世のならひ
北條の徒に苦しめられて　修膳寺の湯殿
飛ぶ繩渦をまいて　二代の將軍弑せられぬ
山はさけ海はあすとも　君に二心あらじなの君
宮柱ふとしくたてゝ　我家守れといのりし君
鶴ヶ岡の拜賀式に　大銀杏のもとに覆面の曲者
刀を揮つて跳り出でぬ　君の最後三代の最後
寂れ行き畑の中に月一つ　三方は山一面は海
五山の鐘聲空に入り　露座の大佛寂しげなり
源氏三代の覇を唱へし地　赭顏短褐の坂東武者
三代の後興亡一ならず　榛荊の中一塊の土饅頭
之れ當年の將軍か　誰か一掬の涙なからむ
鎌倉三代短しと云ふ勿れ　蜉蝣は朝に生れ夕に死す
鎌倉一時寂れしと　今は又一大熱鬧地
天の配劑妙なる哉　（終り）

生靈二萬五千

第四學年乙組　仙波健

時は眞夏の太陽燒くるが如き日
スラブ魂全身に滿ちたる一塞耳維人の蠻行に
歐洲全土の風雲は日增に物凄くなりぬ
時は是八月六日なり
カイゼルの精鋭は威風堂々と
中立を宣言せる白耳義を犯したり
雲霞の如き大軍はミューズの河を越えぬ
然れ共白耳義人の腕には骨ありき
リエージに向ひし敵軍十二萬を防ぐべく
ブリアルモン將軍の設計に係る最新式の要塞に
四萬の白耳義兵
世界の精鋭を以て誇れる獨逸軍は
意氣衝天の勢を以て
白耳義軍——正義の軍——を全滅せしめんと

其の歩兵隊は堡壘壁を測定せんとす

要塞の回轉砲塔より
渦まく黑けむり――阿鼻叫喚はひゞき渡れり
忽ち死骸の山は築かれたり
されど砲塔には些の損害もなし

獨逸軍は激昂しぬ――密集部隊は前進せり
戰は今酣なり――黑煙は今濛々たり

要塞の下馬は斃れ劍は折れたり
あゝ十二萬の精鋭は
今はとばかり雪崩の如く逃れぬ
されど運の極か――地雷火は爆發せり
赤き焰――全滅しぬ數箇大隊

天地蒙塵ものすごき中より
逆擊しぬ白耳義軍
再び起る阿鼻叫喚
悲慘やな槍騎兵は

聞くも忌はし全滅せり

二萬五千の生靈を棄てゝ
あゝ獨逸軍はつひに破れたり
凱歌は揚りぬ白耳義軍の陣頭に
さながら山も崩れんばかりに

あゝ二萬五千の生靈は
白耳義軍の砲彈に敢なくなりぬ
彼等は死に至る迄祖國の爲に戰へり

あゝ二萬五千の生靈は
死すと雖も人は賞讃せず
却つて白耳義軍の勝利を祝福しぬ

神は正義の前には如何なるものをも服せしむ
人は平和の爲には如何なる犧牲をも敢えてす

白耳義は正義の軍なり
其故に神は二萬五千の生靈を倒したり

獨逸は平和を亂すサタンなり
此故に人は二萬五千の生靈を犧牲とせり

正義の前に敢なくなりし生靈よ
平和の犧牲となりし生靈よ
汝等は死せしを怨むる事勿れ
たとへ神罰に死しきと雖も
汝等の祖國より見れば忠義の死なり　（終り）

死

第四學年乙組　野瀨澄圓

凡そ此の世に生を享けたるものは王侯と無く宰相となく賢人を問はず愚人を問はず一度無常の風頭邊を拂へば同じく黃泉の客とならざる可からず。金殿玉樓に起臥し百官に傅かれ春は東閣に花を愛し秋は南殿に月を賞する貴人富者も死の前に妻無く子なく玉樓なく香華一縷の煙と共に黃泉に旅立一ケの卒堵婆と一杓の水とを持ちて合掌せらるゝ一墳墓の主となり而して魂は死出の山三途の川を唯ひとり迷はんのみ。嗚呼なんたる悲慘ぞや。死！

而して五十を一期として冥途に赴くものもあるべし、七十を一期として旅立ち行くものもあるべし。或は三十或は二十にて死するもあるべし、甚だしきは浮世の風に遇ふや否や呱々の一聲を名殘として黃土に旅立つもあるべし佛語に老少不常と云ひ得て切なる哉。然れども短命必ずしも悲しむに足らず人間の價値は浮世に留まれる歲月の長短を以て計るべからず宜しく社會事業に貢獻することの多少によりて定むべし余輩は大いに社會國家に貢獻する所ありて死後に於て永久に芳名を遺さんことを希ふ。

十六夜の月

第三學年乙組　渡邊勝巳

そは夏の夕なりしよ愛らしき笛の音もして……今日の白雨にお月樣も湯浴して出まさむ「竹椽に夕食の席打ちしけ」との父君の宣ふ儘御意に從ひまつり侍べりぬ暖きホームの樂しさは山海の珍味も何の之れに比すべけんや父君はいたう笑みまけ

て獨酌に醉ひ給へばなりもくづして興起るまゝ「やよ阿子笛吹かずや吹きて聞かせよや」と常にもあらでせまり給ふにうらはづかしくもありけれど歌口そつとしめしを與へ輕く一聲……母君はほゝと笑み給ひつ……名もなき一曲あやうくもかなで了れば餘韻嫋々清風に送られて誰がうらぶれの胸にや響くらむ庭の籬に蟋蟀のきりゝと鳴きて夕靄の白う小波したるに思なされて見向けば幹の楓を薄くへだてゝ出でたりな月……十六夜の月峰の横雲に雫拭ひてほゝと笑ひて一搖又一搖輕く搖りて飛びぬ「父上見給はずや美はしの月」と呼べど答は更に無ければ「やよ父上」と再び呼びて見歸るに早くもうまいしゐ給ふ折しもあれや晩鴉一聲西にすぎて又南に聞えて清光ひとり靜に照りぬ。

吾が中學校の門前

第二學年甲組　東野　亮

暖かき春の日光はがらんとした校庭に、かすかな陽炎を作つてゐる。鐵棒梁木などが淋しさうに立つてゐる。七分通り散つた櫻の花片は地一面に落ちて美しい。門前の柳は、今盛に青葉を吹きだして、暖き風にゆられる。

門衛の白犬は今方細き目を開いたが、欠伸一つしてぽか〳〵とてる日光を浴びながら又寢てしまつた。

時々先生の大きな聲、靴屋の音、裁判所の呼聲などが聞える。

城山へ登る人達は、門の中をのぞき込んでは、すぐ大手橋の方へ行つてしまふ。

髭の生へた門衛が、煙管をくはへながら出て行つた。犬は一寸目をあいたが、じやれる勇氣もなくまたすぐ眠つてしまつた。

程なく喨々とひゝく喇叭の音が聞えると、校内は一時に騷々しくなつてきた。つかれた顏、樂しさうな顏をした多くの學生は潮の樣に校門から吐き出されて、端艇、野球の練習に行くもの、家に歸るもの、思ひ〳〵に散つてゆく。

長濱遠足の記

第二學年乙組　野田淨曜

明日野外運動を行ふと掲示せられたるは二十九日なりき。明くれば三十日天氣清くして、碧空に一點の雲も止めず。輕風枝を鳴らして我が面を撫づ。

八時前辨當を背にして學校に到れば、我が友は早や運動場の彼方此方に集りて今日の行先などを打語る。かくする程に「集れ」の喇叭は鳴り響く。

午前八時校門を出でて切通坂を越ゆ。中には早や足痛しなど云ひて、笑れたる者もありき。坂を越えて中仙道に出でたるに、古風の旅宿など存在して往時を追想せしむ。既にして鳥居本村に到れば、此地の名產と人のいふ合羽を賣る店の此處彼處に散在するを認めぬ。神敎丸の大なる金文字の看板を見て松並木に出づ。遠くを望めば內海には淡き靄の立ち罩めて、通ふ小舟も朧なり。此方には米原に行く汽車の松の木を縫ふて走るあり。暫くにして米原の近くに着き休息す。程なくたちて歩めば、足の早や痛きを覺ゆ。米原の町を通り拔けて鐵道の踏切りに到りたるに、汽車の往來繁くして直ちに通り越すこと能はず。汽車の通るを待ちて北國街道を北へと歩む。米原は東海道線と北陸線との分岐點なれば、旅客の交通も亦盛なり。

野道を歩み、村落を通り、長澤を過れば左の方に福田寺と云へる大いなる寺のあるを見たり。足漸く痛く、加ふるに空腹を覺えて苦しさ云はん方なし。漸くにして長濱の町の近しと聞きて勇氣百倍、町を通りて豐公園に達す。此の公園は昔時秀吉の城ありし所と聞きて感慨深し。池田先生の注意を受け五十分間の自由行動を許され、直ちに晝食を喫す。腹の空きたるとて旨きこと限りなし。晝飯を食するまでは邊の景色に眼も呉れざりしが、食後は景色のよきに驚きぬ。前は湖にして水清く折柄暑くありたれば、游ぎては如何になど語り合ふ。公園內には坂田郡物產陳列所ありて縱覽を許すと聞く。又近くには滋賀縣立工業試驗所あるを知りたり。一時十分、喇叭は集れを報じぬ。列をつくりて歸途に就く。歸途は湖岸をつたひて朝妻を通る。此處は魚を獲ること多しと聞く。此日朝來空清くありたれば湖の美しきこと此上なく、霞たなびきて沖のかなたには電線ありなど友の語る

を耳にす。世繼に到りて休息す。此處にて鳥居本米原方面の者は歸るを許されたり。世繼にて彦根までの里程を問ひしに二里餘りありと云へり。世繼を過ぎて筑摩を通りしに、鍋祭りと稱する祭りを毎年行ふと人の云へるを聞きたり。途中喉の渴くこと一方ならず。水を飲みしが後に到りて、水の汚く蟲などの居りしを知りて、思はず身ぶるひせり。磯山に登れば、石礫の多くして足に響き痛きこと泣かん許り。平生なれば眼下の烏帽子岩などに足を止むるに、疲勞してさもならず。松原に着けば、村の小供等の早や水泳をなし居たりしに驚けり。それより馬場町に出で、工業學校の前を通りて歸校したるは午後五時なりき。此日の行程約八里、實に愉快なる一日なりき。

夕立の後

第二學年乙組　中川鐵治郎

炎帝火龍に鞭うち來り、赫々として萬物を焦燻せんとし、巨扇を揮ふも其の効無く、加ふるに月を彌りて一點の雨無く、池沼井泉水殆んど涸れ、東西の稻田、南北の蔬圃、悉く皆枯稿せんとし、農傖の苦煩實に名狀すべからず。

是に於てか、衆天に訴へ、地に祈り、頸を延べ、頭を擧げて、雲霓を望むも、九天蒼々として一物を見づ、人方に以て憂と爲す。既にして、某日に至り、忽ち見る、黑雲の油然と起るを。須臾にして四望暗澹、疾風一陣、竹樹を動かし、電光閃き、霹靂轟き、白雨沛然、盆を傾けて來る。

嗚呼喜なる哉。鋭なる哉。久しき乾魃に枯稿せんとする稻田は、是れが爲蘇生せり。農夫の粗酒を擧げ、喜雨を祝するも亦宜なる哉。

電光一閃、！雷は何處に落ちしならん？

雲は次第次第に北方さして流れ、さしも激しかりし夕立も、今は全く晴れ渡り、名殘の夕陽は、雨に洗われし道路の小石を、瞳しく照らす。堪へ難かりし暑氣も、此の夕立に洗ひ去られ、名殘なく晴れ渡りし夕邊の空も心地よく、憂ふる者は以て喜び、病む者は以て癒ゆべし。

農家の蚊遣烟と共に、さしも日足長き夏日も、次第次第に其光を收め、軒端飛び交ふ蝙蝠の影より、夜の色どりとはなりぬ。時に清風颯颯として、白露庭に滴り、神氣爽快、凉味頓に生じ、遊心頻りに動く。余先づ一俗し、蘇生せる思にて、然迄廣からざる田圃道を朋友二三と共に、袂を列ねて湖邊へと志しぬ。時に東天皎皎として、玉陽の東雲を破りて出で、我等一行の道案内を爲すの思あらしむ。已に至れば、彼方に凉床を水中に設置し、紗燈の影を水に涵すあり。此方に遊舟の沖に掉すあり。凉風おもむろに吹き來れば、水波金をちりばめ、其の快絶雄偉なる壯觀、筆墨の良く盡くす所に非ず。興味盡くる期なく、衆皆歸るを忘る。

余思ふに塊塞の戰雲は、遂に歐洲全土を蔽ひ、然のみならず、東洋の天忽ち風雲を捲き起し、遂に九重の雲深き内より宣戰を布告されしは、去る八月の二十日を過ぐる三日の事なりき。以來我が忠勇なる陸海軍人は、烈陽灼灼として、金石も熔かさんとする膠洲灣頭の日章旗の下に、彈丸雨飛の中に攻擊しつゝある我が軍人の苦心。是れ即ち國家の爲なり。

嗚呼、今余は僅かの暑氣に堪へ兼ね、湖邊に凉を求め、歸るを忘る。何ぞ惰氣を生ずるの甚だしきや。然れ共、人生樂しむ可き時には樂しみ、勉む可き時には勉む可しと。余乃ち衆を促して歸途に上れば、玉陽亦雲中に沒して、余等に歸るを勸むるに依たり。（完）

長濱遠足の記

第二學年丙組　安居喜一

時は四月二十九日第二時限の授業を終へて、疲勞したる頭腦を休めんと急ぎ運動場に出でぬ。何事ならんか、多くの生徒の掲示板前に集れるを見る。かけよりて見れば筆太く書き記されたり。曰く明三十日校外運動を行ふと。欣然雀躍言はん方なし。歸宅して机に向へども何事も手につかず。

明くれば三十日、一天澄渡りて碧玉に似たり。母のなさけの辨當を腰に登校す。午前八時三十分校門出發、彦根町を過ぎて、險岨なる切通坂を越えんとす。

坂頗る絶峻、愈登つて愈嶮、漸くにして鳥居本に入る。合羽の臭鼻をつく。遠近に聞ゆる神敎丸本

舗も此處にあり。鳥居本を過ぐれば一面田なり。畔をすぐれば喧しき蛙の聲耳を聾せんばかりなり。彼方には田の中に入りて早苗植うる田子ありその苦を思ひやればげに一粒も尊きなり。矢倉をすぎて米原に至る。東海北陸兩線の集合點にして停車場頗る大、旅客の出入、物貨の集散頻繁なり。北國街道を北に進み天の河を右に見る。熱心に釣を垂るる人あり。長澤御坊福田寺を以て有名なる長澤をすぎて、湖北第一の都會、縣下屈指の商業地たる長濱にぞ着きにける。時に十二時二十分、こゝぞ我等の目的地、市人頗る活潑、坂田郡物産陳列所、滋賀縣工業試驗場等あり。古、身を貧賤よりおこして美名を海外に轟かしたる英雄豊太閤の城趾に設けられたる公園に於て晝食を喫し、一時十分下坂濱より濱路を辿りて歸校の途につく。湖面平にして鏡の如く金魚をも放ちたく思へり。遙かに沖を眺むれば眞帆片帆は點々として浮び、あざやかに水鳥二三泛びて遊べるを見る、嗚呼この絶景我々をして疲勞の足に再び勇氣を溢れしめたり。これより朝妻に入る、天の河の下流にして往古湖東の大港なりけるが、慶長時代に廢せられたりと聞く。足深く入込む濱路をば絶景に見惚れつゝ進む。

やがて鍋祭を以て知られたる筑摩をすぎ磯山を越す。

虎の嵎に嘯くが如き烏帽子岩を初め或は蹲るもの或は躍るもの等點々として散在し、其の勝景さながら一幅の繪畫の如し。

漸くにして雲上に聳ゆる彦根山表れたりと思へば早や松原を通りけるなり。

遂に彦根に入り五時歸校。無事解散。三々五々うちつれて家路へと急ぎたり。嗚呼この壯快永久に忘るゝを得ず。

我が中學校の門前

第二學年丙組　大久保進一

時は四月二十四日の暮つ方、終日曇り勝ちであつた日もいつか暮れて、空には白雲黑雲が幾重にも幾重にも重り合つて西へ走つてゐる。

處は彦根中學校門前の砂原、左手の裁判所は黑門

嚴めしく閉ぢられて、人の影だに無い。金龜城は高く雲際に聳えて、苔むたる老樹は其の腰間を包み、清き流れはめぐつて其の麓を洗つてゐる。鐘の丸御野立所も近く神々しく拜せられる。遠くは伊吹の連山を望み、眼界廣く、人煙稀れに、坦々たる道路は流に添ふて暮靄徐ろに其の末を霞めてゐる。實に詩的の仙境である。

正門の「滋賀縣立彦根中學校」の九字は幾歳の風雨にさらされて薄く淋しい。懷かしい校舍はうす黑く雲を突いて泰然と休息し、宿直室の電燈が獨りまたゝいてゐる。頑丈造りの無骨なる道場は自ら一種の訓戒を與へて床しい。其の後から赤い新校舍の一角がヌツト顏を出してゐる。我等は遠からず此處に移つて、智德を磨く事が出來るのである。

夕暮の靜けさを破つて呑氣な井戸堀の調子が手に取る樣に聞える。大工が三人もつれ合つて、青柳の向ふを家路についた。

垣の內の櫻は風なきにハラ〳〵と散つて、廣い校庭は一段の寂莫を加へ、午前八時からの運動の名殘か白い紙片が散らばつてゐる。樣々の運動機關はさも氣樂げに晝の疲れを休めてゐる。門衛には黑い影がしきりに何か書いてゐるやうだ。

入相の鐘はボーンと木の間をゆすつて、晩鴉が塒に急ぐ其の聲が、山の彼方に沒すると、あたりは全く夜の幕に包まれてしまつた。

夏の農家

第一學年丙組　大鳥居　蕃

夏が來た、田植はもう濟んだがまだ〳〵仕事が多い。先づ第一に草取り、九十度前後の炎天にさらされながら、朝から晩まで一生懸命。竝一通りの困難ではない。然し秋になつて採つた米を俵につめ、十俵も二十俵も積み重ねた時のことを思ふと亦樂しいものである。

今日も未明より父母とともに手拭で頰冠りして田に出た。有明の月が薄く西の空に殘つて、今にも消えなんとする星が三つ四つ空に輝いてゐる。

東が漸く白んで、隣の田の人も段々出て來た。朝飯を手早くかい込んで、畦に出ると、小學生が五六人聲を揃へて「道をはさんで」を歌つて行く。

チヤビ〳〵ザク〳〵。右往左往して草取りをする。眞に心持が好い。十時と四時とに飯を食べに歸つて、之で終りと鋤、鍬肩に家路を指して歸る時は早葉末々々に夜露が光つてゐる。

私等は毎日かくの如く終日働いて、人生に最も必要なる食物を作り出すとに努めてゐるのである。

夏の農家

第一學年丙組　中村吉治

頭に汗の湯氣を立てゝ鋤と鍬とを背にして歸つて來た百姓爺は門口迄來ると鍬と鋤とを下して薄暗い家へ這入つた。

小さな庭には興ある蟬の聲、青々とした綠で活々としてゐる。

爺さんは先づ頭の鉢卷を外し、薪に火をつけてゐた婆さんと何か話す。涼しい夕風の吹く度に桐の木陰は又動く。

村寺の鐘が鳴ると早乙女のすげ笠は一時に、あちらこちらに動いた。沖津の町の乘合馬車はガタリゴトリと少ない客を乘せて、細い田舍道を暑さうに走つて行く。

倫敦通信

終身會員　森莊三郎

拜啓本年一月に故國を出發仕り候後は意外の御無沙汰に打ち過ぎ申譯も御座無く候、倫敦に來りても別に變りたる事も御座なく候にはやはり東京の下宿屋に居りしと同樣に机や書物に親しみ居候。洋行未だ半年に滿たず候へ共此の半年は誠に變化多き時を過し候、例へば人の顏だけに就いて申しても支那人、マレー人、エジプト人、佛人、英人と數へ申候。然し小生の最も强く感じ候事は始めて「日本」てふ者の「世界に於ける地位」を知り得たる事に御座候、吾人が空氣中に生活して空氣を知らざる如く、日本に居る間に考えたる日本と日本を離れて考へたる日本とは非常の差異ある事を覺り申候、一例を申さば「日本語の通ずる範圍」と英語の通ずる範圍とを比較すれば以て世界に於ける日本の地位を察し得べく候。然し英國人とても始めより斯かる大帝國を有したるには非ずして最近二三百年の間に西歐の一島國より奮起して以て今日の盛大を致したる事に御座候。日本が支那に勝ち露國に勝ちたるは眞に發展の第一歩たるに歩まり申候、少くとも吾人は日本語を以て世界を一週し得るだけの發展を期せざる可からずと存候願はくば我が校友會々員諸君が單に眼光を日本內地にのみ限局せずして世界を以て我が墳墓地とするの思想を根底にして東に西に南に北に大和民族の殖民地を開發せられ候樣偏に希望仕候名所舊蹟の記述又は人情風俗の異などについては既に幾多の先輩によりて著述せられしものに御座候に付敢て未熟なる小生の筆を勞するの必要も無之と存候たゞ右の一事は如何にも强く小生の頭腦を刺戟仕り候に付着英の御挨拶と共に敢て一言仕候。匆々

部報

學藝大會

沈默寡言の金龜の健兒時に無能以て自ら目せらると雖時に望みて倜儻不羈の大勇を振ふ之豈に君子一端の資格を具備せるものに非ずや而して彼ら都人思慮淺薄にして未だ君子愚なるが如きを知らず我らは彼らが爲めに悲しみて已まざるなり。

今茲六月二十七日我が學藝大會開催せらるゝや辯士勃然袂を振ひて起ち虹霓を吐くものその幾何なるを知らず今左に其の盛況の一般を記さん。

小早川會長の訓辭

「吾人日常其志操感情を正しく發表せむ事は處世に當り極めて重要のことなるが能くその趣旨を理會せられむが爲めにはその言論に對する他人の注意と同情とを得る樣心懸けねばならぬ之が爲めに

思想を練り之を正しく表出せむことを學ばねばならぬ尚又其論ずるところ正しくとも音聲語調宜敷を得ざれば或は聽者の注意を惹かず或は卻てその反感を買ひ折角の說舌をして無効に終らしむることがある今日本會を開くに至つたのは實に之等を練習せしめる趣旨に基くものであつて諸子は本會は勿論今後と雖も之等につきては良く注意せねばならぬ」と學藝大會開催の主旨を示し生徒の努力を促がし次に本日の大立物猛獸狩實驗談の辯士三石白水氏が略歷を紹介せられ最後に拍手を適度に制せんことを望まれたり宜なる哉秩序整然一糸の亂れざるが如く辯士熱誠を竭して此の神聖なる會場に立つの榮を擔ひたること。

腦の体養法　四乙　仙波　健

諸君!!!　大喝一聲して學藝會の衰へしを慨嘆し番組に組名を間違へて記されしをさものろ〳〵しげに述べ立てたり。次に腦を休養せしむるの要を云ひ併せてその法をも詳說せり柄こそ少さけれ滿身是膽てふ聲滿堂に徹底せしめしは感ずるの外なし惜しい哉時間足らずして中途にて降壇せしこと。

維新の三傑（對話）　二乙　上松憲一　菅沼廣次　垣見甚一郎

明治維新の大業を翼贊し奉りし功臣中公家より出でたる三條岩倉の二公を除きては先づ指を西郷、大久保、木戸の三士に屈せざるを得ず夙に勤王の大義を唱へ東西に奔走し廣く各藩の志士と交はり王政復古の氣運を促し維新後も廟堂に立ちて大政に參し邦家柱石の臣として國民の景仰する所となれり世に之を維新の三傑と言ふとて菅沼は西郷隆盛を上松は木戸孝允を垣見は大久保利通を說けり聽く者その人を想見せずんばあらず。

忠實につきて　三甲　松岡源之進

辯士流るゝが如き舌もて忠實なる犬につき二三の傳說を話し說きて人類に及ほし其要を云へり沈着の態度愛すべく形容の語々極めて妙を得聽者をしてあきざらしめたり。

禮儀と温良（英語）　五乙　明塚德三郎

禮義温良の如何は人生運命を決すと口調極めてクリーヤなりしも疾きに失せざりしか。

櫻井の里（對話）　一甲　西谷顯照　小西彌代松　長見貫吉　門根秀一郎

聞くも想望す楠公父子の忠烈、棣蕚未だ肯へて北風に向はず、二世の全節誰か儔侶なる、一日一議用ひられずして時の非なるを知り、父子相會して決別す櫻井の驛、父子の生別死別にも勝りたらん。

蝕について　五甲　岡野　清

日月蝕の依て起る理を悟し斯學を研究するの趣味多きを述べてこゝに袂を投ぜむことを勸めたり、我等草昧多年の雲霧こゝに披かれて暗夜に一道の光明を得たる感あり、深く岡野君その人に謝す。

何故に國家を愛するか（對話）　二丙　市毛景行　大久保進一　藤田德次郎

生れて苟くも人たらば宜敷く其國家を愛すべし然らば何故に國家を愛するか今右の三士は之を修身試驗問題によそへて互に論じ合へり實にその言の如しかくては滿點なるべし。

錦の直垂（朗讀）　三乙　寺田杢太

忠勇一途の村上義光鎧に立つたる矢十六筋無造作に折りかけて急ぎ宮の御前に馳せ來り君に悟せども股肱の臣を惜みて聽かれずかくては果てじと義光態と言葉荒らかに諫め參らせつゝ進み寄りて御鎧の上帶を釋き奉る宮御感淺からず御涙ながらに御物具御直垂を脫替へさせ給ひ

「我爲めにかゝる忠臣を捨てんこそ悲けれ幸に生き殘りたらば厚く後の世を弔らはん若し敵の手に掛からば同じ冥途の徒に伴はんずるぞさらば義光」

との數行吾人をして感涙に咽ばしむるなり。

稀なる孝行（英語）　四甲　波木居修一

レイアフイリアルアフツクシヤンの題下に古今の佳話を話すこと極めて落着き發音クリーヤなりき

運命　三乙　杉立龜之丞

思想豊富、辯士亦極めて沈着にして實に雄麗の辯なり、惜しい哉聽者倦怠の色あり隅にて欠伸するものありき。

關羽の人格に就て　三甲　長尾　慈雲

極めて抑揚に富む半眠の狀なりし聽者鐘の如き聲に驚き醒むれば氏今や一心に關羽人格を說き立つるに當り恍惚耳を傾く滿場爲めに人なきが如し、あゝ君の辯人を魁するの概あり老巧の辯にして三嘆の外なし。

水兵の母　（對話）　一乙　田中常吉　竹中聯之助　小山忠雄

感心なるは水兵が母。かくまで國を思ひ我子を思ふか。世界に名を轟かせる孟軻が少時母の敎如何なりしは世人の良く探知せる所なり、あゝ子は親に倣ふ誠に賢母に養育せられし彼こそ幸なれ、痛快なる母の手紙徵兵避のある此の邊の正夫に知せばや。

勇敢なる水兵　（唱歌）　二乙　藤野幸太郎　川上梅一　橋本郁郎　土川與惣次郎　石原彌次郎

あゝ勇敢なる水兵の歌。節は沈痛、調は悲壯、餘音嫋々絕へざること縷の如く幽壑の潛蚊を舞はし懦夫をも起たしむ。一堂慨然として皆同憐の涙を灑ぐ、

噴水實驗　五乙　久田賢次

一フラスコ上に他のフラスコを倒に置き互に管を以て聯絡されたり。かゝる單純なるものを以て噴水實驗をなすとは實に奇怪千萬なりしが技師一度手術を施すや水は直ちに噴き出で千變萬化筆紙に及はず見るものをして驚かしめたり只技師の說明稍明亮を缺きしは憾むべきか。

酒に就て　四甲　佐々木正樹

燃ゆるが如き熱情は溢れて流暢なる辯となり所謂立板に水を流すが如く飲酒家多き所以酒害を恐れざるもの多き所以、個人及社會に及ぼす害毒等萬言一瞬にして謂ひ竭す。間々聽者をして思はず拍手せしめたり然れども其れ餘りに疾きに失し聽くに困せしめたるものあり。

安宅（勸進帳）（對話）　二甲　義經。可知猛男　辨慶。芝居匡道　戸樫左衛門。北川周一郎　讀み手。若林太郎平

義經强力に身を窶し赤面して後より從ふ。君の御大事と肩にて息すれ共流石は辨慶、頓智百出、大言壯語、眞赤に關守を瞞して毒蛇の口を脫れ出づ。壇下にある若林極めて落着き氣に註を入れ宛然實況を映出せしめ本日對話中最も異彩を放てり。

良習慣の力　（英語）　四乙　末松秀雄

善習多ければ多き程その人の品位は高まるべく僅少の惡習も尙ほ其の人の品位を損ずべし而して習慣は善にまれ惡にまれ此の行爲を繰り返すに由りて成るものなれば我等は善習は努めて之を養はむことを期し惡習は戒めて之に染ざらんことを要す君の言頗る快活にして明亮なりき。

胃と身体　（對話）　一丙　大鳥居　蕃　松居彌七　中村彌平　野口謙藏　小野綱三　田井中棄三

或は口となり或は手となり足となり異口同音胃の安閑たるを攻擊し遂に同盟して各職務を停止するに至れり、居ること數日にしてその不利なるを悟り肉袒荆を負ひて胃に謝し爾來協同一致敢へて齟齬するなかりき。

吾人正に協同すべし然れども競爭なき協同は雷同にして協同なき競爭は排他なり協同に依て衆力を集中し競爭に依て實力を發揮し以て社會の進步を翼賛す協同と競爭とは猶鳥の双翼の如く又車の兩輪の如く互に相待ち相助けて社會の進步を從すものなり。

現代と戰國時代　五甲　山田善衛

渾身是膽。咆哮以て第二の國民の醒覺を促すこと切なるものあり聽衆双耳を聳てゝ靜聽感服すあゝ月桂冠は終に君に歸しぬ、大言壯語正に秦張に及ばんとす。

猛獸狩實驗談　三石白水

元東京報知新聞記者三石白水氏は曾て露國密獵船に拿捕せられあらゆる艱難を嘗め北海道樺太の山野を跋涉して猛獸狩を試み白熊二頭熊九頭を屠り

後に東京報知新聞社より朝鮮虎狩に特派せられ一年有六ヶ月の久しき間山の如き艱難と闘つて憩はんともせず遂によく異功を奏して猛虎三豹二熊十一狼廿八餘を斃して歸來し近く亦シャム及インドに向けて一生一代の猛獸狩を企て世界的大冒險を敢行せんとす吾校友會はその行を壯とし氏を聘して一場の講演を乞へりその概要は卷初講演中に記せり。（終）

野球部報

八幡商業學校對本校之記

此の吾人に最も記憶すべき八商對彦中の野球試合は、誠に申譯無き次第乍ら、記錄が不幸にして、詳しく錄されなかつた爲、其狀況の概畧を次に擧ぐる事と致します。

第一回彦中方の先攻に始つた、劈刀猛打者谷田ボックスに現れたかと思ふと忽ち安全打を打ち飛ばし、西村亦良く球を撰んで是亦安全打をした谷田

其間にホームに突進して先一點を擧げ彦中の氣焔大いに擧つた、此分ならば彦中方ドンドン生還するだらうと思はれた處試合の前半は餘り成功を急いだ爲、好い球を待たずに妄打して、凡死多く爲めに屢々好い機會を逸した事尠くなかつた、八商替り攻めたが、打擊の振はない勢か好打一向に飛ばず外野は極めて閑散であつた、先頭打手藤村シングルを打つて出て、例の速い走力を利して盜壘を重ね、つまらぬ味方の過失に生還させたのは實に惜かつた、安達、原田、山下共にバタバタと枕を並べて凡死した。第二回兩軍共誠に平凡、彦中方二つ程安打かあつて頗る有望に思はれたが後援續かず一人も生還し得なかつた、八幡方皆美しく三振を食つて本壘の露と消えた、此處我投手の功名と謂ふべしだ。第三回頃からそろそろ試合が熟し始めた、八商の應援團は聲を嗄らして猛烈に野次り初めた、二死者後、松林、久德、好打に出たが、西居死して、松林のみを生還した、八商打擊少しも振はず、三者皆引續いて死んだ。第四回彦中打擊順の良好なのに乘じて打ち掛つたが、練習して居らなかつた故か、餘り當りの良いのが出なかつた、西村ヒットし續いて中道亦二壘打を飛ばして出たが後援か續かず、西村壘でアウトになつて止む、八商方厥起して此回に二點を入れた即二死者後、山下、平居ヒットして遂に兩者共生還した。

第五回彦中方平凡、八商方は彦中の失策を利してシングルを打つた原田が其儘ホームに歸つて一點を與へたのは實に重大な失策だ。第六回、モー後正規では三回しか餘つて居らぬ、彦中頻りに安全球を打つが生還し得ない、タイムリーヒットにあらざると策戰其宜しきを得ぬ爲だらう、殘壘西村安打に出で中道亦安打したが、亦々後援續かず八商方では竹村に一點を與へて食止めた。

第七回、松林、好打し久德、西居に送られて三壘迄行つたが住居一壘に死して好機を逸した。八商方では此回迄に既に六點を算して居るので其意氣頗る擧つて居る、原田生還して既に七點となつた、彦中方非常に締つて遂に八九回を以て見事敵陣を混亂して勝利を得る事が出來た、八回に入ると、皆の顏には必死の色か浮んで居た、皆自重して好球を待つて打つた所、打つ球打つ球が皆絕好のタイムリーヒットとなつて安打續出、是に奇計を加へて益々敵陣を混亂せしめた、八商の危機は實に此回に現はれたのである、西村見事な二壘打ちを打つて出で、中道亦當りの良い左翼ヒットを放つて西村三壘に、中道二壘に依つた、山本亦ヒットを打飛ばし西村安々と生還、松林是亦巧なる安打を放ち中道生還した、久德も亦シングルを放つて出た、西居二度程霞む樣な高いフライを打上げたが、三ストライク目に例のお得意の右翼方面に大飛球を飛ばし右翼手をオーバーして寄宿舍近くの所まで轉々し遂にホームランとなりしに乘じて、久德、松林共に欣然として、本壘に躍り込み一擧に四點を擧げ意氣非常なものであつた、ボックスに立つ者皆續々と絕好のヒット許り飛すから此の分ならば未だ未だスコーアが增す事と思つたのに味方の感違ひでスコーアする事が出來なかつたのは誠に殘念な事であつた。

八商又決死の意氣で奮起したが、最初兒嶋が安全打に出で後れて辛くも生還し得た。

第九回兩軍の得點は此時九對七で彦中は二點を敵に與へて居る若し此最後の回に生還し得なければ勝利を敵に委ねばならぬ彦中の奮起したのも無理はない、幸ひ打擊順は極めて良く、劈頭强打手谷田中堅を脅かして出でる中道又遊擊を拔く安全打を放つて一壘を占める次に猛打手山本左翼に打つた毬は見事二壘打となつて谷田生還した、外野の忙しきこと意の廻る程だらう、當りかけると妙なもので松林又もや中堅を拔く三壘打で中道、山本本壘に飛び込んだ、彦中の猛打實に驚くの外なし、久德又も三壘の傍を目にも止らぬ熱毬に打拔いて一壘を占めると松林既に生還して居る、宛然走馬燈の樣だ奥田遊擊を誤らせて出ると住井二壘の頭上を拔く安全打に久德生還す、打擊順一廻りして次は例の谷田だ、又大きな奴を飛ばすだらうと見て居ると案の定打ち上げて大飛毬は左翼の頭上を遙か高く越えて塀の邊りに轉々す奥田、住井勇躍ホームに突進した、西村直毬を遊擊に打てば受け損じて胸に當るを幸ひ例の快走力を利して一壘を占めた、中道遊擊を拔き谷田生還、山本シングル、松林シングルに西村、中道生還し得たも、後の二人は後援續かず此に遂にサイドアウトとなつた、彦中既に十七點を算して居る。此裏八商形勢を挽回せんと努力した如何せん意氣昂れる彦中の爲めに僅かに一人の生還者を得て止んだ。スコーアは十七對十と云ふ大差で彦中の勝利となつた、彦中は凱歌を奏して引上げたのである、併し此マッチは餘り緊張したマッチではなかつた、見よスコーアは如是大きい、締りの無い證據である、次に兩軍のメンバーを掲げます。

八幡商業　下村田居田達村嶋崎
山藤原平池安竹兒宮
投捕一二三遊左中右
手手壘壘壘擊翼堅翼
松中山奥久谷西西住
林道本田德田村居村

試合時間三時間（午後一時五十分始　午後四時五十分終）

彦根体育倶樂部對本校
野毬仕合

大正二年十二月七日彦根体育倶樂部對本校との野毬仕合を催す、此の体育倶樂部と云ふは彦根町實業家の内にて好毬家相集り舊本校の野毬撰手等を加へて組織した者屢々彦根町にて諸種の体育競技を催して運動思想を皷舞し貢献する處少からず。

午後一時四十分開始す第一回体育倶樂部の先攻に始まる、劈頭打者竹中遊擊を衝いて倒れ續く湯本我新進投手の棘腕に上げられてPゴロに止めらる山下一打良く左翼を拔きて一擧二壘に迫る田中遊擊を拔いて出でしに徒らに功を急ぎて遠く壘を放るれば毬は忽ちSS.IB.IIBと轉送せられて遂に刺さる山下如何しけん此間に呆然として生還せず、彦中替り攻む谷田遊擊飛毬に、西村三振に倒れたるも中道自重良く四毬を惠まれ、やがて、隙を伺ひて二壘、三壘の盜壘に成功し松林三壘に熱毬を呈し之を誤ませて出づるに及び本壘に躍り込み先一點を先ず、山本僥倖を賴みしバント成功せず。

第二回、倶樂部は三者平凡に倒る、伊藤3Bを襲ふて成らず西村、小林共に美しきスクイングと共に三振を喫す。

彦中、毬を選ふ事の巧みなる西居、四毬を利し投手の暴毬に2Bに進み續きて3Bを盜めば好打手奥田遊擊を拔きて西居生還す住井三振せしも久德中堅を拔く大安全毬に奥田生還す、谷田絶好のヒットに一二壘間を貫きて敵陣を混亂せしむれは久德此間に生還す、實に倶樂部の危機なり谷田2B3Bを盜み西村、と相呼應してバンドエンドランを試みたるに見事成功して谷田ホーミンス中道の輕打良く中堅を貫きて二壘打を放ち一擧2Bに迫る、松林又も奇計を弄し西村呼應してバントエンドランを試みて再び成功西村ホームに突進す、松林2Bを殺倒して刺され山本の犧牲大飛毬に中道ホーミンス、此の好況ならばと思ひしに倶樂部漸く自重し、西居三振して山本殘壘。

第三回、倶樂部北川忽ち三振を喫し青柳遊擊にゴロを呈して刺され竹中遊擊を拔きしも湯本三振して殘壘。

彦中奥田1Bにゴロを呈して死し住井ナットアウトにて幸1Bに進みしに2Bを盜壘して成らず久德遊擊を誤らし谷田四毬を得て進み、西村責任を荷ひて、ワンヒット、ツーニンの聲に送られしも三振を喫

してとむ。

第四回、倶樂部山下の中堅飛球は我野手の功に歸し田中SS飛球にSSを誤らせて進み伊藤バントして田中を送り冒險にも投手のモーションを盗みスチールホームを企て成功す。

彦中中道例の輕打良くSSの頭上拔くの好打に出で2B 3Bを殺倒すれば松林の3Bを失策すに及び生還す松林2Bに依れば山本と相呼應して犧牲打せしめて3Bに依り奥田のナットアットするに及びて生還す奥田2Bを盗みて成らず。

第五回、倶樂部も小林1Bの傍を拔くの安打に出で北川例の如く三振、青柳又久德投手の棘腕に三振を喫す小林捕手の逸毬に3Bに至り竹中SSに打ちしも牽制せられて入らず竹中功を急ぎて一二壘間に挾殺せらる。

彦中山本ナットアウトに進み2Bを盗みて成らず、落付きたる西居悠々ボックスに入り獨特のスウイングに熱毬は飛鳥の如く遙か中堅の頭上を越えて絶好のヒットとふり勇躍3Bに迫る實に見事なるヒットなりき山本功を急がす自重せば、生還のチアンスあるべきに惜しき限りなり住井の1Bを拔く安打に西居生還す住井1Bにありて一安心と思ひてか油斷するや捕手よりの毬に忽ち刺さる警しむべき事にこそ。

第六回、倶樂部打擊順の良きに乘じ猛襲すれども入らず加ふるに我投手の腕冴え來りて湯本先づ三振續く山下四毬を得しも2Bに刺さる意氣甚だ擧らず强打手田中安打と思ひきや見事バッテリーの策計に倒る。

彦中久德三振谷田ヒットし西村四毬を得るに及3Bに依る西村2B盗壘をなして刺さるゝ間に谷田生還す。

第七回、倶樂部伊藤SSに飛毬を呈して倒る西村3Bを誤らして出でしも一二壘間に挾殺する。

彦中松林SSに熱毬を與へ、狼狽して惡毬を投ずるに及で2Bを得、山本投手を誤まして出でしも、松林功を急ぎて二三壘間に挾擊さる。

第八回、兩軍平凡

第九回、倶樂部最後の奮鬪も奏功せず、山下哀れ三振强打手田中出づれば投手久德は頗る自重して巧みなる策計を弄し之を三振に葬る、伊藤Pゴロにとめを刺されてゲームセットとなれり、時に午後三時半なり、試合は遂に十二對三プラスAの大差を以て彦中の大勝利となりぬ。

此日彦中の投手久德君は始めてプレートに立ちしに其の初陣の成績實に是の如く功誠に著大なりき輕快なるボディースウングに鮮かなるモーションを起して投毬する樣實に見事なり敵を三振に打取る事實に十三の多きを數へたり切に自重を祈る、次に兩軍の成績を掲げん。

	彦根中學	谷田村道林本居田井德	西中松山西奥住久
打擊數	3	2	4
安全打	2	1	2
得點	2	2	3
三振	1	2	0
四毬	1	1	1
盜壘	3	3	4
犧牲球	0	10	0
殘壘	1	0	1
	(SS)	(LF)	(C)
	2	1	2
	1	1	1
	0	0	0
	1	1	1
	0	0	0
	0	0	0
	(3B)	(1B)	(CF)
	4	5	4
	2	1	1
	1	0	1
	0	0	0
	1	0	1
	0	0	0
	0	0	0
	(2B)	(RF)	(P)
	5	2	3
	0	3	1
	1	0	2
	0	2	1
	1	0	0
	0	0	0
	0	0	0
	29	9	12
	9	4	17
	7		

試合時間一時五十分
審判官　山田亮吉君
（竹中）

八幡商業學校對本校野毬試合の記

六月七日の日曜日を利し八商校庭に於て本校對八商との野毬試合を行ふ　先づ彦中の先功に始まる第一回劈頭强打手出谷田出づ、例に依り痛快な大熱毬を飛ばすかと思ひきや敵の投手の緩毬とスルーカーブに吊られて辛うじてナットアウトを食ひ一壘に依る、西村又もやスローボールに惱まさ

	体育倶樂部	竹中(P)	湯本(1B)	山下(SS)	田中(C)	伊藤(2B)	西村(3B)	小林(LF)	北川(CF)	青柳(RF)
打擊數		4	2	2	2	3	1	2	0	1
安全打										
得點										
三振										
四毬										
盜壘										
犧牲球										
殘壘										
		17								

れて三振す、中道自重好毬を待ちて四毬を得、谷田と相呼應してダブルスチールを企て見事成功す松林3Bを猛襲すれば谷田、中道一擧にホームに突進し、二點を先んじて氣焔別丈なり、久德左翼大飛毬に出で山本中堅を貫く絶好のタイムリーヒットに松林、久德相次ぎて還る、山本中堅の惡毬に3Bに依り、住井良く四毬を得て2Bに出で、奥田の1Bを衝き其惡毬に生きてフルベースなり、次は例の强打手谷田なり、俄然熱毬は中堅の奥深く飛び入りて三壘打となり山本、住井、奥田の三者生還す西村2B飛毬に死し松林又も3Bを拔きて出づれば谷田ホノミンす、是の如く最初よりヒットに次ぐにヒットを以てし此時既に八點を算し勝敗の分定まれり久德、山本凡死して止みぬ、八商替り攻むれども殆ど三者宛倒さる

小嶋一壘手に弱ゴロを呈して退き大久保pゴロに田中三振を喫して止む、

彦中住井巧みに四毬を得西居三振せしも奥田の中堅大飛毬の鮮かなる二壘打となりしに乘じ3Bに殺倒す

谷田如何しけん三振を喫す住井生還

八商方雪村2Bを誤らせて出で澤嶋2Bを貫きて出で雪村生還す、澤嶋餘りに功を急ぎて一二壘間に挾擊さる宮崎三振山本死毬を受けて出で捕手の暴球に2Bを得逸球に3B到達せしも永元三振して止みぬ

第三回、彦中中道SSの頭上を拔きて出で2B、2Bの盜壘を重ね、久德の中堅大安全毬に生還す山本左翼を襲ひて久德生還す住井三振、西居四球を得しも奥田pに飛球を呈して止む

八商小島再び1Bの緩毬に倒さる、大久保三振し、田中pゴロに止めらる、

第四回谷田技手を誤まらして出で捕手の1B暴球に2Bに依り西村のバントに3Bに入り中道と相呼應してバントエンドランを試みて見事成功して生還す中道のバントは巧みにセーフバントとなり1Bに入り次ぎて2Bを盜み久德中堅に大安全毬を放ちて生還す、山本又左翼に大安全球を打ちて2Bを盜み久德3Bに入り、捕手の逸還に生還す住井三振西居四毬を得しも奥田Pフライに死して止む

八商雪村三振、澤島の右翼大飛毬は我野手の功に歸し宮崎2Bを襲ひしも山本死して止む、八商氣勢更に昂らず、遂に我に抗し難きを知り第四回戰を以て我に降れり　十五對一の大差を以て彦中の大勝利となれり

次に兩軍のメンバーを掲ぐ

	彦根中學	八幡商業
	谷田	小島
	西村	大久保
	中道	田中
	松林	雪村
	久德	澤嶋
	山本	宮崎
	住井	山本
	西居	上田
	奥田	永元

	彦根中學		八幡商業	
打撃數	3	SS	C	0
安全打	1	2B	2B	0
得點	2	C	1B	0
犧牲打	1	P	SS	0
三振	1	3B	3B	1
四毬	0	1B	RF	0
	0	RF	LF	0
	1	CF	CF	0
	2	LF	P	0
	22			1
	10			1
	7			0
	15			0
	10			0
	4			0
	6			0

（永元）

審判官　山田氏　平井氏

試合時間　午後三時三十五分始　午後四時十五分終

	彦根中學	八幡商業
犧牲打	0	0
三振	0	0
四毬	0	0
	1	0
	1	0
	0	0
	0	0
	0	0
	2	0
	6	0

（松林）

岐阜中學對本校野毬仕合

大正三年六月廿八日岐阜縣岐阜中學校と岐阜師範學校庭に於て野球仕合を催す前夜の猛雨にて暑氣猛烈なり岐中校庭に於て仕合する豫定なりしがグラウンド當日午前中には乾かず爲めに師範校庭にて試合する事に變更せり午後一時五十分開始

第一回岐阜中學先攻に始まる老巧打者棚橋巧みに球を選びて四球を獲2Bを盜まんとせしかば捕手2Bに投球せると少しく低きに失して間に合はず高橋3Bに打つて倒る、强打手大橋又3Bを衝きて成らず棚橋此間に3Bに迫り、投手の惡球にて生還一點を先んせらる伊藤SSの飛球に死す、彦中替り攻む、谷田第一球を發止と打ては忽ち中堅大飛球となり西村の犧牲打に送られて3Bに至る、中道四球を利して出で後援を望みしに松林、山本共に凡死して入らず

第二回坪内先づSS飛球に死す小林SSを誤らせて出で2B3Bの盗壘を重ね高木1Bフライに死せしも加島の右翼飛球犧牲となりて入る星野3Bフライに倒る

彦中如何にしけん三者凡死す、山本バントを試みて成らず住井p飛球に死し西居三振を喫す

第三回棚橋再び四球を利し棚橋2Bの盗壘をなせば捕手遊撃に投じたるに彼誤りて生かす高橋又四球を得大橋投手ゴロに死して棚橋3Bに高橋2Bに依り伊藤のバントに送られて棚橋生還高橋3Bに入る、坪内3Bの飛球に死して止む

彦中奥田三振したるが強打手谷田出づれば一打良く右翼の頭上を抜きて大安全球を放ち一舉にして2Bに至る西村走者と相呼應してバントエントランヲ試みて谷田を3Bに送り中道強打すれば熱球は中堅を貫くの二壘打となりて谷田勇躍本壘に入る、中道3B盗壘をなして殺さる

第四回、岐中小林三振を喫し高木1Bの飛球に死し加島2Bを襲ふて成らず、彦中松林2Bを衝きて入りしも一二壘間に挾撃さる久德三振、山本SSを襲ふて1Bに殺さる

第五回星野SSを抜きて出でしに忽ち一二壘間に挾殺せしに棚橋中堅にシンバルを打つて出で高橋又SSを抜き伊藤SSを誤らせて出で棚橋歸り大橋又もSSを熱球に貫けば球は轉々として一舉2Bに迫り伊藤高橋生還す、大橋3Bを盗み坪内2Bを誤らせて出づれば大橋歸る小林pゴロに死し高木中堅右翼間を貫きて2Bに至るに及び坪内歸り加島の飛球を2B捕ふるに至りて遂に敵の猛襲を喰止めたり、彦中住井2Bに強ゴロを與ふれば暴球を投じて1Bに生る西居のバントに送られて2Bに進み3Bを盗み投手の暴球に生還す奥田三振せしと思ひきや幸ナットアウトにて1Bに生き2Bの盗壘を企だてゝ成らず、谷田SSを抜きて出で2Bを盗み投手の暴球に3Bに至りしも中道三振して入らず

第六回星野SS飛球に死し棚橋3Bゴロに、高橋3B飛球に死す彦中松林四球を利して出で久德三振せしも良く2Bを盗み次に3Bを盗まんとして刺さる、山本Pゴロに死す、

第七回大橋SSゴロに、伊藤2B飛球に坪内遊撃飛球に何れも皆凡死せり

彦中挽回を圖らんと奮起せしも成らず、僅かに一點を得たり、住井四球を利し西居、奥田三振せしも盗壘に盗壘を重ね捕手の3B投球は惡球となりて生還す

第八回小林四球を利して出でしも2Bに盗壘して刺さる、加島一壘ゴロに死し星野三振す

彦中西村三振せしも中道努力して左翼にクリーンヒットを放ち2Bを盗みて成らず松林2Bを衝きて殺さる。

第九回彦中最後の奮闘を試みて成らず遂に八對三プラスを以て遺憾ながら勝利を彼に讓りぬ、時に午後三時三十分兩軍の成績次の如し。

	彦根中學	彦谷西中松久山住西奥	田村道林德本井居田
打撃數	6	4	4
得點	4	2	2
安全打	2	2	2
犧牲打	1	0	0
三振	0	1	1
四球	0	1	1
	1	1	0
	1	0	0
	0	0	0
	1	0	0
	0	0	0
	19	6	4

試合時間午後一時十五分始三時五十分終

審判官山田氏近藤氏交互

（大橋）

	岐阜中學	棚橋	高橋	大橋	伊藤	坪内	小林	高木	加島	星野
打撃數	6	2	3	4	4	4	3	5	7	8
得點	4	1	2	1	1	1	4	3	1	9
安全打	1	1	1	1	1	1	3	5	1	1
犧牲打	2	0	0	1	1	1	0	7	0	0
三振	3	0	0	0	0	0	1	8	0	0
四球	5	0	0	0	0	0	1	4	0	0
	7	1	0	0	0	0	0	3	1	0
	8	0	0	0	0	1	0	4	0	0
	9	0	0	0	0	0	0	3	0	0
	31	4	1	1	1	1	8	7	1	4

（松林）

大垣中學校對本校野球仕合之記

同日午後五時より大垣中學校庭に於て本校對大垣中學との野球仕合を行ふ、大垣の先攻に始まる

第一回河波四球を利し2Bを盗み續きて3Bに至らんとせしより捕手之を刺さんと3Bに投じたるに壘を放れすぎたる3Bのモーション少しく遲きに失して球を握り得ず劈頭一生還を許れしは惜しむ可し勝野Pゴロに死し大橋我投手の棘腕に惱まされ三振を喫す平手四球を惠まれしが2Bを盗みて刺さる。

彦中谷田3B飛球、西村3B強ゴロに死したるも中道

良く中堅を襲ひて安全打を放ち2Bに至らんとして寸尺の處にて殺さる。

第二回、大中樹松2Bを衝きて死し、岩田、加藤、枕を竝べて我棘腕投手の槍玉に擧げられたり。

彦中松林Pフライに死し久德1Bに死し山本SSの飛球に何れも凡死を重ぬ。

第三回、河合四球を惠まれ投手の暴球にて2Bに至りしも三輪三振し勝野Pフライに死し、大橋三振して止む。

彦中漸く奮起す、住井四球を利して出で投手の暴球に2Bに迫り西居又四球を得て2B1Bに依る、次は強打手谷田なり悠々ボックスに入り好球を待つ谷田のワンヒット即ツーランを得るなり我が狀況頗る佳なり此雷雨沛然として來り敵投手は投球の難なるを以て我に試合の中止を迫りしも我は之を否認して壓くまで戰はんと云へ共聞かず問答を重ぬる中降雨次第に繁くしてグラウンドは一面の水となり試合續行眞に不可能となりたれば遂に試合を中止して後日戰ふの約を結びて分れぬ。

兩軍のメムバー左の如し

彦根 6 谷 4 西 2 中 5 松 1 久 3 山 9 住 8 西 7 奥
學中 田村道林德本井居田
大 1 河 4 勝 3 大 5 平 6 樹 2 岩 7 加 8 河 9 三
垣 波 野 橋 手 松 田 藤 合 輪
學中

八幡商業學校對本校野球試合之記（第三回戰）

七月　日曜日を以て午後二時より彦根工業學校庭に於て本校對八商との野球を行ふ彼や先月自校に於て我と戰ひ大敗せしを以て其復讐戰を爲さんとして來襲せしなり本校卒業生山田亮吉氏及八商生池田氏球壘交互に審判の勞を取らる此日彦中の打撃最初より大に振ひ猛打に次ぐに猛打を以てし安打續出して六回の終り迄に既に得點十五點を算せしに八商方は僅かに一回に味方の過失に依りて六點を奪ひ四回一點五回一點を得て計五點を算せしのみにして到底我に抗し難きを知り接戰七分の末十五對五プラスの大差を以て彦中の大勝に歸せり

大阪人造肥料會社野球團對本校野球試合之記

大正三年八月九日彦根工業學校庭に於て大阪人造肥料會社野球團と本校との野球仕合を行ふ此の大阪人造肥料野球團と云ふは大阪實業野球團中最強チームにして近く關西野球大會の覇權を握りし強チームなり一行中の投手大井齊氏は舊早稲田大學野球團の鐵腕投手にして其強肩は内外に雷名を轟かしし人なり其他に早稲田出の撰手二三を雜え中中の強チームなり

正午より早稲田大學現撰手横山氏の審判にて試合を開始す　大肥の先攻にて

第一回、土屋劈頭2Bを強打して校舍に當て一擧2Bに至る坪井三振せしも大井又も2Bを貫き校舍に當てゝ2Bに依り土屋生還す志賀、中村凡死して止む

彦中谷田忽ち怪投手大井の強肩に三振を喫す山本四球を惠まれて出で2Bの盜壘見事成功し、中道直球を遊撃に呈せは山本ダブルグレーを喰ふ

第二回、大肥、高橋バントして1Bに殺さる小田三振を喫す荒木ヒットせしも山本三振して功なし

彦中松林凡死の後久德SSを襲へ共ならず西居捕手の失策を利して進み忽ち2Bの盜壘成り尚3B迄も殺倒せしに後援續かず

第三回、大肥、土屋SSを失策らしめて出で坪井2Bを襲ふて倒れしも大井の再び2Bを貫くの強打に生還す志賀2Bを拔きて出で大井3Bに至り續きて本壘を殺倒せしかば遊撃手捕手に投球すれども間に合はず彦中平凡にして生還者なし、梶死し、谷田三振に葬られ西村四球に出で中道強打してSSを誤らしめしも後援續かず

第四回、大肥方、高橋Pゴロに倒る、小田中堅を衝きて一擧2Bに迫りしも山本三振土屋1Bへの直球坪井のPゴロ倒るゝに及びて入らず

彦中久德飛球に死し西居四球を利して出で2Bを盜めば捕手の投球低きに失して西居を生かし引續きて西居3Bに殺倒すれば2B蒼皇て暴球を投じ3Bを受け損じ西居勇躍本壘に躍り込み最初の一點を擧ぐ

第五回、大肥方、坪井2Bを衝きて倒れしも大井例

の如く一打すれば目にも留らぬ大飛球は右翼の遙か後方なる材木倉庫の屋根に當りて、見る見る三壘に迫る、即三壘打なり、人々皆々强打に驚く許りなり、志賀中堅を襲へは二壘打となり大井悠々ホームに入る、中村3Bにゴロを呈して出です、高橋SSを誤らせしも小田SS飛球に死し荒木中堅飛球に死して甲斐なし

彥中梶良く2Bを貫くの絶好なるヒットを放ちしも他凡死して入らず

第六回、大肥方三者、枕を竝べて凡死す、即山本Pゴロ土屋を1B强襲して成らず坪井又pゴロに死す

彥中方又平凡、西居2Bを强襲して、3Bまで殺倒せしも後援續かず

第七回、大肥方例の大井强打してSSを誤らせ2B 3Bの見事なる盜壘なりて志賀三振せしも中村の飛球に入る

高橋出でゝ2Bを盜みしも我捕手の强肩に刺さる

彥中方平凡

第八回、兩軍平凡大肥方小田、SS飛球に荒木SSゴロに山本三振して贅る、彥中山本Pゴロ中道SSフライ、松林投手直毬に死す、此直毬を投手大井見事にグラブに收めしは實にフワインプレーなりき

第九回、大肥方打擊順の良きに乘じ棹尾の大活躍を試みたり、土屋左翼中堅間を拔く二壘打に出で坪井中堅を拔く三壘打に土屋歸り大井又々中堅を衝きて坪井生還し志賀右翼を誤まらせて大井と共に歸る、後三者高橋3Bを衝きて死し中村Pのフライ山本三振を喫して止む

彥中も此れに厥起して見事敵陣を混亂しき久德何糞つと猛打すれば熱毬は中堅を拔くのヒットとなり西居之に勵まされて、强打すれば又々右翼大飛躍となりて進む、住井負けじと滿身の力を込めて一打せば見よ、毬は中堅の頭上を越えて、遙か彼方に轉々して二壘打となり一擧2Bに迫れば久德、西居欣喜雀躍してホームに突入して凱歌擧る、是に至り漸く敵投手自由して後の三者を平凡に打取りピンチを脫す、

遂に、七對三のスコーアを以て大阪人肥方の勝利となれり

兩軍の成績次の如し

大阪人造肥料團

	打擊數	得點	安打	犠牲打	三振	四毬
2 土屋	4	3	2	0	0	0
4 坪井	4	1	1	0	0	0
1 大井	5	3	4	0	0	0
6 志賀	4	0	2	0	1	0
3 中村	5	0	0	0	0	0
7 高橋	5	0	0	0	0	0
5 小田	4	0	1	0	1	0
8 荒木	5	0	2	0	0	0
9 山本	1	0	0	0	3	0
	37	7	12	0	5	0

（松林）

彥根中學

	打擊數	得點	安打	犠牲打	三振	四毬
6 谷田	2	0	0	0	3	2
3 山本	1	0	0	0	1	1
2 中道	4	0	1	0	0	0
1 松林	2	0	0	0	2	0
5 久德	3	0	1	0	0	0
8 西居	3	1	2	0	0	1
7 住井	1	2	1	0	2	1
4 西村	4	0	1	0	0	0
9 梶	2	0	1	0	1	0
	22	3	7	0	9	5

（大井）

東海五縣聯合野球大會參加之記事

十日間の夏季練習！期日は是の如く短い、併し撰手等の心身は緊張して居つた、炎熱赫々として骨肉をも熔さんと白日は其猛威逞しくして居つたけれ共母校を代表して大會に參加する責任の重且大なるを覺えた彼等は九夏三伏の酷暑何するものぞと、此に、早稻田大學野球撰手淺沼譽夫君今度撰ばれて主將となつた其人を聘して、技術の練磨に孜々として勵んだ、猛烈な練習を積んだヂリヂリと照り付ける白日下の練習は苦痛であつた、併し其苦痛の中には一種の男性的の快樂を味つた、グラウンドに立つが最後水分は一切取れなかつた湯などは決して飲まされなかつた、人は明るい灯を慕ひ、暖い食を求めて歸り行くにも拘はらず犇々と迫る黃昏の中に、戞々と、バットの轟きをさせて勵んだ、是くて十日間の夏季練習も夢の樣に早く過ぎ去つた愈々大會へ向參加する事となつた戰勝の夢に憧憬れつゝ、本年の大會は三重縣第四中學校即神風薰る伊勢山田の中學校で八月十日より四日間催される事となつた、本校との組合せは八月十一日が對松阪工業學校、十二日が山田中學校であつた、次に兩軍との對戰の概況を記さん。

彦根中學校松坂工業學校
野球試合の記

八月十一日正午始、松坂先攻す。

第一回、松坂、池永先づ四球を利し2Bを盗めば成功、戸村は我投手の棘腕に三振を喫す、鹽野3Bを襲ひて成らず。

池永3Bに至りしも富田の三振するに及び餘なし。

彦中谷田例により劈頭の一球を遊擊に與へて生る西村3Bの傍をヒットに拔き中道亦SSの頭上を拔くタイムリーヒットに谷田ホームに突入、西村2Bに依り一點を先ず。

松林亦3Bを拔く絶好のヒットに一擧2Bに迫、二壘打なり、西村生還、中道3Bに依る、左打者山本と相呼應してバントエンドランを試み見事生還して歡聲雷の如し、次は油斷のならぬ猛打者西居なり第一球を發止と打てば熱球は唸り〳〵て次第に加速度を得中翼越の大飛球となりて校舍の屋根に衝き當りて遂に樋の中に其姿を沒せり一擧2Bに迫り松林生還す、敵味方共其強打に驚く、大會中唯一のレ

コードなり、住井四球を利し2Bに殺さる、西居3Bを殺倒し之を誤らせてホーミンす、梶三振に斃れしも既得點五を算し氣焰可大なり。

第二回、松阪方、米田四球を利す、小世古三振を喰ひ中村2B飛球を落すに及び1Bに出で米田は此球をタッチせられて死す。

山際三振

彦中、久德の左翼大飛球は敵に名を爲さしむ、谷田左翼方面に熱球を送りて出で、西村SSを衝きて出で、中道SSに飛球を呈して死す、松林又、飛球を投手に與へて死す、谷田生還の見込みなしと感じたるにや猛然モーションを起して本壘に突入し、猛烈なるスライディングを爲して、見事スチールホーム成功す、其大膽なる驚くべし。

第三回、池永中堅に安全球を放ちて2Bに依る、戸村3Bを衝きてならず鹽野三振富田飛球に死す。

彦中山本Pゴロに死す、西居巧みに四球を利して出でしも後援續かず。

第四回、松阪方、厥起す、藤原3Bに直球を呈し、米田三振を喫す小世古四球に出で2Bの盜壘成り中村四球を得しも山際三振して止む。

彦中久德四球を得、谷田の強打良くSSを拔くのタイムリーヒットとならんとせしも久德2Bにフォースアウトさる、西村3Bを襲ひて1Bに依る、中道三振、松林2Bの頭上を貫きて谷田之に還る、西村續きてホームに突入す、山本ナットアウトに死す。

第五回、池永1Bを拔き戸村中堅を誤らせて3Bに至り池永生還補手戸村を牽制せんとて投じたる球少しく外れて戸村の生還を許す、鹽野三振に倒る、富田左翼飛球に死す、

彦中方、西居再び四球を惠まる、確實打者住井の強打忽ち二壘打となり西居3Bに依りしに投手よりの球に死す

梶3Bの傍を拔きて出つ住井久德の緩打球に觸れて死平凡なり

第六回、小世古3Bの傍を拔きて出で2Bを盜まんとして成らず捕手よりの球に殺さる、中村四球を得、山際1Bにゴロを呈す、池永右翼のヒットに出で中村生還戸村三振

彦中方、西村三振中道轉打良く一二壘間を貫き松林SSを誤らせて2B1Bに依る山本2B飛球に死す、中道3Bに進みしに捕手蒼皇て3Bに暴球を投じたる爲め生還す、西居三振

第七回鹽野四球を利して出でしも無爲

彦中方住井危く1Bに生き梶滿身に力を込めて打てば熱球は飛んで左翼オーバーのタイムリー二壘打となり、久德1Bを强襲すれば住井此に歸る、谷田悠然ホックスに入り第一球を打てば又も見事に左翼中堅間を貫きて梶生還す、松林好球を發止と打てば目にも止らぬ熱球は砂塵を上げて中堅を拔き見る見る奥深くに轉々して一擧3Bに至る、絶好の三壘打なり久德、谷田、走馬燈の如く生還す

第八回兩軍平凡

第九回松阪工業最後の奮鬪功を奏せず僅かに一人の生還を許してゲームセットとなり、遂に十三對五プラスAの大差を以て月桂冠は敵に降れり

次に兩軍のメムバーを掲ぐ

山田中學校對本校試合之記

八月十二日午前十時始

試合時間二時五十分（正午始）（午後二時五十分終）

	打數	得點	安全打	犧牲打	刺殺	捕殺	過失	三振
彦根中學	5	4	3	2	2	2	1	0
谷中	4	2	1	1	0	0	1	1
西中	3	2	1	0	2	2	0	1
松山	5	1	1	0	0	0	1	0
山西	3	1	3	1	2	0	1	0
住田	3	0	0	1	0	0	0	1
梶村	4	1	1	1	0	0	0	0
久道	3	1	1	0	0	0	0	1
林本	4	1	1	0	0	0	0	0
居井	3	1	1	0	0	0	0	0
德	3	1	1	0	0	0	0	0
	33	13	11	6	10	6	4	4
							（池永）	

	打數	得點	安全打	犧牲打	刺殺	捕殺	過失	三振
松	6	4	2	2	0	0	3	0
阪	4	1	2	1	0	0	0	3
池	1	2	5	0	0	0	1	2
戸	2	8	3	0	0	0	0	0
鹽	8	7	8	0	0	0	0	2
富	7	3	9	1	0	0	1	1
藤	3	5	1	0	0	0	0	1
米	5	9	1	0	0	0	0	0
小	9	0	0	0	0	0	0	2
中	3	3	3	0	0	0	0	1
山	3	3	4	3	0	0	0	0
世	4	3	3	1	0	0	0	2
永	4	2	2	4	1	0	0	1
野	2	2	4	2	1	0	0	1
田	2	1	2	1	3	0	0	0
原	1	0	1	0	2	0	0	2
田	1	1	1	0	0	0	0	1
古	1	1	1	0	0	0	0	1
村	3	1	1	0	0	0	0	0
際	2	1	1	0	0	0	0	2
	22	13	11	4	4	3	4	13
								（久德）

彦中先攻に始まる

第一回、彦中方誠に平凡なり

山田中奇襲策戰見事に功を奏して一回三人の生還を與へたり第二回彦中形勢を挽回せんとせしも敵投手の驚く可き速球に惱まされ遂に最後まで生還者なかりとは實に遺憾なり山田此回に四點を入れ第三回一點第四回又も四點を入れて計十二點を算しぬ、彼は確實なる打球をなし、外野は極めて閑散なりし、其バントするや皆極めて巧みなるセーフバントとなりて我陣形を混亂しき、二、四、六、七の各回屢良好なるチアンスありしも策戰敗れ後援續かずして挽回すること能はざりき六回より久德投手疲勞の故を以てプレートを松林に讓り五回、六回ノーヒット、ノーランに終らしめしは殊勳なり規定に依り十二對〇を以て七回にて勝を彼に讓りぬ、兩軍のメムバー左の如し

彦根中學　林道本村德田井居（久德）（林松）

松中山西久谷住西梶

投捕一二三遊左中右
　　壘壘壘擊翼堅翼
手手手手手手手手手
山田中學　西菊鍬濱澤前堤增置
川川原田山納　田鹽

（五年中道、河崎錄）

武術部々報武術大會

時是れ六月二十八日新綠正に滴らむとする時我校々友會は武術大會を開きぬ天も此の壯擧を識つてか朝よりの日本晴、音も名高き赤鬼の日頃鍛へし鐵腕を鳴らして戰ふ樣血湧き肉躍るの觀ありき。いざ其の番組を次にかゝげむ。

劍道三本試合

（廣田○○　渡邊）（石原　木ノ下○○）（田中○　中川○○）（大堀○　漢見○○）
（林　田原○○）（丸橋　田中○○）（堤　藤田○○）（成宮○○　角田○）
（長屋○○　滿島）（上松　北川○○）（滿島○○　渡邊）（阪東　藤本○○）

（井關○○　夏川○）（大堀○○　丸橋）（角田○○　金森）（夏川　田中○○）
（小森○　堤○×）（廣瀨　江島○○）（金森○　坂○○）（横居○　服部○○）
（松村○　藤村○×）（井關○○　中川○○）（田中正○　田畑○○）（中田○　廣瀨○×）
（吉田○○　辻○）（西部○○　中村○）（西谷○○　中村捨○）（小野　北村○○）
（濱野○○　野瀨○）（吉田○　松岡○○）（廣瀨○○　横居）（野田　岡野○○）
（坂本○○　廣野）（池山○○　金森○）（神口○　坂本○○）（廣野○○　山根）
清水　朝日奈○○　水島先生○○　熊瀨川先生（藤川先生○○　森下先生）

對外仕合

東小（岩泉　本校（廣田○○）　東小（八木○　本校（大堀○○）
東小（若林○○　寺澤○）　東小（武永○○　本校（坂○○）
東小（川崎○　岩泉○○）　東小（河崎○　八木○○）

一本仕合

一等　池山　五本勝

二等　坂本　三本勝　成宮同
三等　八木　二本勝　大堀同　井關同
　　中村同

中にも目醒しかりしは本校卒業生神口君對本校撰手坂本の取組なりき敵は本校在學中名大の兩刀使い此方は當校の大立物互ひに鎬を削つて戰ふ樣龍驤虎視一同手に汗を握りしかど敵は卒業後竹刀慣れざる故にや脆くも敗れたり

柔道三本仕合

（藤田　中島○）（藤野　大久保○○）
（久米　林○○）（藤野　木ノ下×）
（張谷○○×）（椙山　長屋○）
（坂池山○○×）（田中正○　丸橋○×）
（野瀬○　廣瀬○×）（角田○　椙山○○）
（川上○　中島）（夏川　田中正○）
（野田○　夏川）（中川文○　大久保）
（松岡○○　美濃部○）（張宮川○○）
（藤村　美濃部×）（藤本　廣瀬×）
（清水○○　濱野）（野田　中村○○）

（服部○　皆木）（佐成×　寺田）（草野　松原○）（横居○　江島）
（西谷　朝日奈○）（清水×　中村）（竹中　江島○）

對外仕合

東小（武永　本校中川○）　東小（横田○○　本校椙山）
東小（椙田　本校林○）　東小（西村○　東小川瀬）

一本仕合

一等　中村　四本勝　椙山同
二等　宮川　三本勝　大久保同
三等　江島　二本勝　長尾同　張同

かくて壯快なりし大會も終り折りからの霹靂は天も思はず本日の壯圖を歎せしならむ。

水上部々報
堺ケ濱出漕の記

巒山の藍深く木々の梢の綠重くして一滴を落さばために色融けて流れむずる樣の今日六月七日、今

しも撰手七名はいたく躍る胸の皷動を双の豊頰にもらす笑に打ち消して池田部長に引率され圖南の鵬翼に駕すべく彦根の停車場にと急ぎぬ。

これより先ずる事數旬我部は突緒として神戸新聞社主催關西聯合端艇競漕大會に出漕すべく招待を受けぬ。

されば我等は何條以て應諾を躊躇すべけむや。これより先我が　國母陛下の歸りまさぬ哀しき大御幸この方正に咲き綻び初めたる我部の赤き血潮の花も未だ咲かすによしなくあはれ無情の嵐に誘はるが最後……膽吹山嶺の淡雪の消ゆると共に……と思ひきや世は輪轉して又樂しきの春は來にけりいでや咲さむ漲る血潮の赤き花憶へば斷腸の懷ありすぎにし去歳の春山野破踏神戸に遠征せし我部の撰手はあはれ、遠來の珍客敗るの一語の下に競漕場裡を退陣して來るべき時機を待つの去むなきに至りし事は我等が骨髓に徹して日未だ新しき昨日の事遺恨骨髓に貫徹し臥薪嘗膽待て忍べの下に彦陽四百有餘の健男子の屈辱は見よや今に會稽の山ならぬ海に雪ぐべく凛たる霜雪皎々晶々として櫂を包むる朝にも夕べに强風一陣颯と金濤紫瀾朱波泡哮してために怒號天地に滿るとも泰然動かず恐れず、諸花爛熳たる春も何處を吹くやと冷視して只管恢復恢復とあせる折も折、今此の快報を得て何ぞ我等の餘裕すべけん哉。議は忽ち一決しぬ、猛烈なる練習は日を積んで益々猛烈の度を加へぬ、終日人こそ知らねかわく間もなき額の汗を拭ひもあへず兩手には黑き血痕を鮮かに印する白き包帶を卷きに卷き尻は摺れて血潮は淋漓として白きズボンに慘みて板に血痕點々と留むるを見ては微笑を湛へては武者震なし山を碎く狂瀾の中も一番叱咤する舵手の聲に身は勵まされ、篠つく雨に身は川鼠然も奮然怒號する舵手が聲に心は激せられ今日とも思はず明日とも思はず只管獰猛に獰猛の練習を重ねてより白駒の步早くも今日は扶搖萬里の風に馭すべきの日とはなりぬ。

停車場内には我全校の生徒諸君我等が今日の懸軍萬里の遠征の途を壯とせられ無數の應援旗を持つて此の蝟集せらる者無量數百。滿腔の感謝を打拂ふ口には固き決心の許に我もし勝たでは生きては

再び歸らじと誓ふ戰士一行の心の裡こそ實に哀れなり。

フレーフレー。萬歳、シツカリやつて來てくれ等熱誠溢る許りの應援の裡に戰士を乘する汽車は動きぬ、應援の聲一際高まりぬ、吾人等はベストを盡して而る後に去むべく誓ひぬ

一條の黑煙を名殘と金龜城下の町に低く殘して汽車は愈全速力にて馳出しぬ。

嗚呼懷しの金龜の白亞の城よ、余等の歸り來べきの日には必ず御身に見參すべき土產を以て歸りなむ

されど〳〵もし我武運つたなく敗衂せん日には、いかでか何の面目あつて再び御身に見ゆるを得んや。兵は凶器なり、勝負は慘憺なり、いまし暫時は金龜の城もこれが見納めかと思へば感慨無量英雄の心緒亂れて麻の如しとや言はん

河瀨八幡草津今は馬場をも過ぎて鏡の如き湖面を車窓より眼下に看降しつゝ車の廻りも緩き逢阪山隧道となりぬ

されど普通の旅路と異なれば何の面白味ぞやあるべき、互にかはす車中の談話も車輪の響きに時折杜切れては鎭目に移り固く引締る口にはそれそれ言ひ知れぬ心の裡の思を秘せる樣なり。京都も過ぎて今は大阪も迎へて送りぬ、送り迎ふること數驛にして遂に神戸に着きぬ日は已に虞淵に沒せむとす

時已に午後七時停車場には早くも先輩の方迎へられ一行意氣衝天の概もて斜陽を浴びつゝ指定旅館に入りぬ同館には已に八幡商業の撰手先陣しつゝあり共に室を相隣して互に懇談をかわしぬ、隻方とも我こそは此度の月桂冠を得べきか荒猛者なりといはん許りし面持何處にか現はれたり。我等は愴惶の裡に夕食を終り愈々明日の戰鬪準備の參謀會議は開かれぬ、互に鳩首疑議して各自獨殊の戰法を論じ軍略を馭し孫吳も顏色なからしむるの概ありき已にして戰略決せり。明日の英氣を養ふべく早く床に就くされど頭は熱して眼は愈々さへて眠らんとして眠られず身は床中に横臥すと雖心は已に可も知らぬ堺ケ濱に通ひて明日の競漕場裡に光景走馬燈の回轉するが如く廻ること縷々として

絕えずやがて夜はふけぬ

皆は眠りぬそも亦彼等の夢や今何處を徨ふらむ。

明くれば愈六月八日、一刻千秋の思ひの競漕當日とはなりぬ。

黑金筋入りたる怪腕の底力の程を見せくれんと數多の健兒互に入り亂れてために山鳴り、雲湧き水躍る一大活劇が演せらるべきの日は今日となりぬ天籟肅として聲なく曉風寒く健兒の筋肉をなめぬ轉た快なり、温褥の裡徒らに蠢々すべきにあらずこれより前我等は未だ海の人たるの經驗なければ先づ鹽屋沖に至り神高商の端艇を拜借して激烈なる練習する事一時間餘。戰備已に足れり矣今はたゞ戰機の熟するを待つあるべきのみと悠然と堺濱會場に啼りて撰手控所に腰を下しぬ、此の所は市街遠く離れし一の谷の麓、涎々たる白沙の河に寄する水淸く岸に連りて茂れる千載の老松は今は過ぎにし其昔驕る平家も久しからずして、花の都の京都をば燒野の原と化しさりて落花の如くにふみしめて都を遠く西國路に下りたれど未だ心に名殘をや留めけむせめては一度び都に歸らんものと西國の强者數萬引具して陣を敷ける所こそ此の一の谷なれされどあわれ武運盡ては如何せむ。又もや此の處を捨て、斜陽赤くさす波路を遠く四國にぞ走りたりけり。

而も奇なるかな。今日しも我等は源氏ならねど東の軍となりて遠く西の國々を擊ち從へんとて奮然孤軍こゝに出陣して龍鬪虎擊の大活劇を演せんとは圖らざりき。

亦もや源平一の谷の合戰は大正の御代に行はれんとは。

長き汀に打集まる看者、無量數萬已に活劇は演せられぬあわれ一の谷一夜の花と散る艇あれば勝誇れる猛者もあり。

勝誇りて叫ぶ者あれば敗戰して袖絞る可憐の勇子もあり海は陸と相竝んで其の應援の至らざるはなし。

競漕は回を重ぬるに隨ひ壯絕は亦快絕を加へて其の勇さなんどいふばかりなし。十一回終り十二回初りして遂に十三回とはなりぬ、愈々我彥中赤鬼の出場の秋とはなりぬ。

學校名	コース	着順	分數
神戸商業學校第一(赤)	第一コース	三	不明
大阪高等工業學校第一(青)	第二コース	二	三四(分秒)
彦根中學校(白)	第三コース	一	三二

時しも神商及び大阪高工の猛烈なる應援は起りぬ聲は天地に冲して破れん許りの勢、然も我れは、敵軍重圍の裡に孤軍横行應援者あわれ、池田部長を初めとして他に數名

されど腕にかつては覺あり、敢て應援の有無によつて亂りて花を他に讓らんや、大高工の如きは實に關西學生角力界の覇權を握れる豪の者の寄合ひ赫顏鐵腕、膂力己に我等に絶ず神商も亦此の近界を荒せる獰猛の戰士なり。

而も彼等は四季常に海にて練習せるなり、我等は湖上に於てこそ腕を鍛へたれ、海には未だ無經驗といふも理なきにはあらざるなり。而して此の三者立つて洋々たる大海にて中原の覇を爭はんとする、其の意氣や已に敵を呑めるなり三艇は靜けき波上を進む汽船に曳れてスタートラインに向ふ途中の汀に立てる人も眼に入らばこそ勇しき奏樂の

音も耳に入らばやこそ八百も夢の間に過ぎてスタートラインに着く浮標に付けば逸早く方向を定めぬ、先ずれば人を制すとかや。

今し戰機は熟せり矣と見る間もなく白煙一發天高く冲せりソラ漕いだの聲諸共に艇は白沫を蹶つて飛び出ぬ。

されど悲しい哉海と湖とは其の漕法を異にせりスタートにて我が計略空しくうたかたと消え只管力漕に力漕を行ひぬ四百米を過ぐる頃までは、稍もすれば我艇守勢に出でんとせしも機を見ては敏なる我が舵手の發火の如き叱咤は一語は一語と共に其の功を奏して見る〳〵敵は次第に下りぬされど敵も豪の者、何條さるべき渾身の勇を絞つて必死となりて我に肉迫せんと企つ事屢々なれど、我も自ら彦中の健男兒を以て自ら任ずるもの爾く易く敵に攻撃せらるものかは。

得意のラストヘビ！の下に力漕する事十數本、艇は遂に決勝線を突破しぬ號報は轟きぬ、白旗は審判席頭上高く折柄吹薫風に片々として飜れり

斯くして我等は最初の勝者となりぬ七勇士の得意や思ふべし。

時に天候益々荒みに荒み、盆を覆さんばかりの雨沛然と降來り、且亦某校の紛議起りて甚しく競漕の進行を沮害せしため遂に去むなく次回は明日となりぬ。

旅館に歸れば艇界の覇權已に我が手に歸せり矣といはんばかりに怪氣焰を吐く豪傑連の意氣天を衝く今宵の夕飯は何故か美味なりき、又明日もある事なればとて躍る胸を故意に靜め明日の勝負や如何と思ひつゝも今日の疲れに早や皆、白河夜舟と漕ぎ出ぬ。

明くれば九日、雨降つて地愈固まる、昨日に代へて今日は海上の經驗の程も殆んど覺えたれど我等が自信は益々固れり。

九時過再び會場の門をくゝれば、滴らんとする老松の綠の間を點々と點綴せる萬國國旗の白や赤、朝風心地よく今日の勝武者を歡迎するが如く飜れり。今日式場に再集せし勇士は昨日の勝者のみざれば今日の競漕や昨日に比して一層激烈を極めん回を重ぬる事數度遂に

我等が出場の秋は來ぬ。

學校名	コース	着順	分數
御影師學校第一(青)	一	二	三八(分秒)
彦根中學校 (白)	二	一	三六
御影師範學校第二(赤)	三	三	不明

敵手は名にし負ふ關西一つの剛の猛者且つては去歳の春、名譽ある月桂冠を得て中華を荒せし傍着無人の荒武者なり今や御影全校の生徒は熱烈なる應援を初めぬ、旗を振る拍手をする應援歌を歌ふ、跳る、飛ぶ舞ふ所在應援の法到り行はれざるはなく、已に勝算胸手にありといはんばかり。

どふやら今年も優勝旗なんど丁然として歌へるも片腹痛く覺えたり。

されど〳〵驕る平家は久しからず、能ある鷹は爪をかくすとか自信あつての捲土重來萬里遠征の此の勇士、何ぞ彼等が聲援位に霹易せむや。

やがて氣艇は靜かに三艇を曳き出でぬ、あはれ復脊敵を受けぬ四面城外楚歌の聲されども我が艇は餘裕綽々敢て迫らず、スタートに着きぬ。

三艇戰備整ふやヨーイドンと一發波上鋭く響き渡